



# 小さな国の大きなファンタジー

バーゼルから、おもちゃの旅

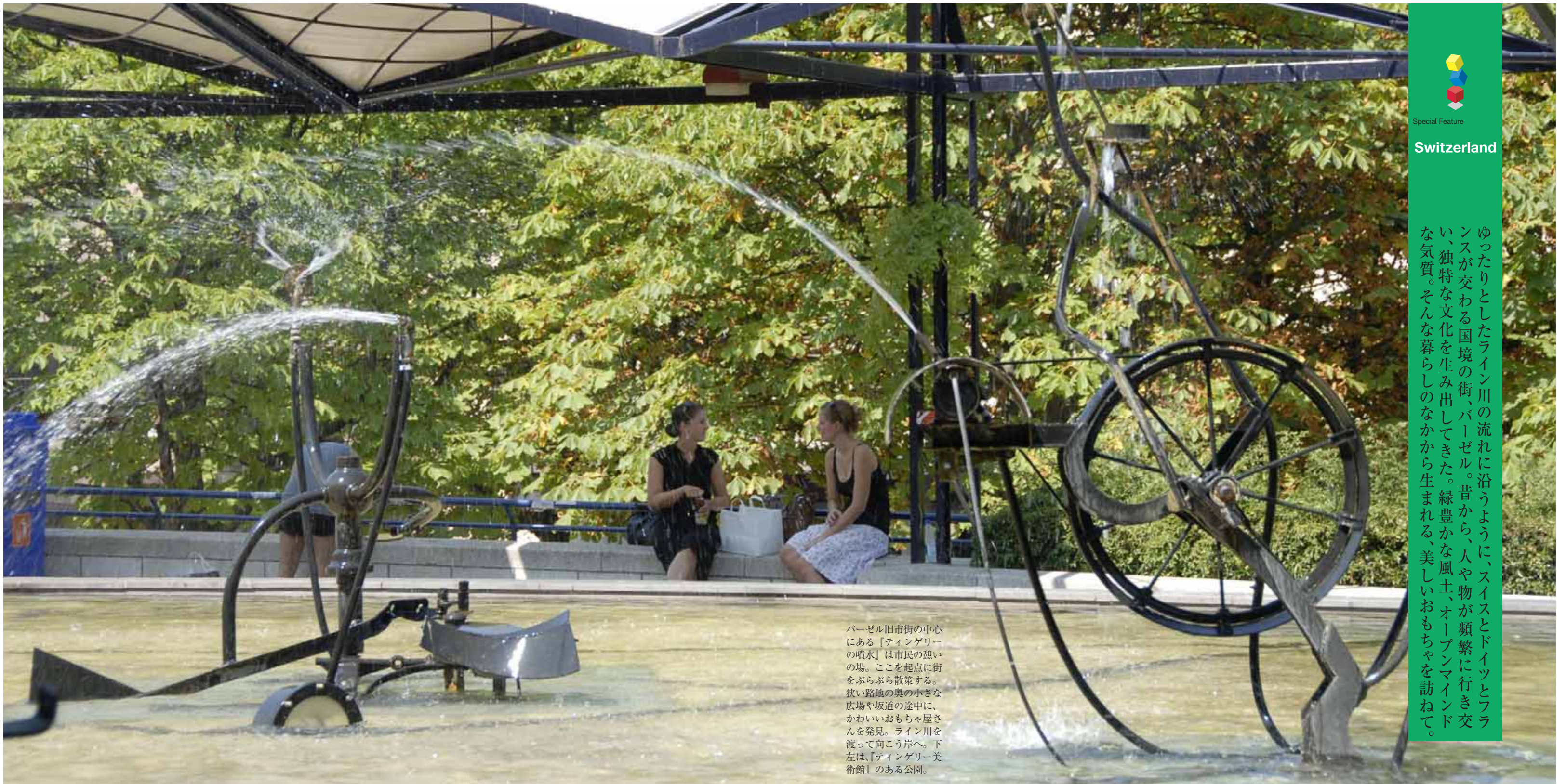
Special Feature  
Basel  
Switzerland

Text by  
Yoko Utsumi  
Photographs by  
Manabu Matsunaga

文・内海陽子 撮影・松永学



ツォーフインゲン村の幼稚園にて。「ネフ」社のおもちゃで遊ぶ5歳の女の子。手前に積んであるのは「ネフスピール」。左ページは、「キーナー」社のモビール「蝶」。



Special Feature

### Switzerland

ゆったりとしたライン川の流れに沿うように、スイスとドイツとフランスが交わる国境の街、バーゼル。昔から、人や物が頻繁に行き交い、独特な文化を生み出してきた。緑豊かな風土、オープンマインドな気質。そんな暮らしのなかから生まれる、美しいおもちゃを訪ねて。

バーゼル旧市街の中心にある「ティンゲリーの噴水」は市民の憩いの場。ここを起点に街をぶらぶら散策する。狭い路地の奥の小さな広場や坂道の途中に、かわいいおもちゃ屋さんを発見。ライン川を渡って向こう岸へ。下左は、「ティンゲリー美術館」のある公園。



## チューリヒの カエデから 生まれる宝物

大塚生産

「新しいおもちゃを考え出すのは、苦しみもあるけれど、とても楽しくてハッピーな作業。赤ちゃんを産むようなものかしら」と、お茶目で気さくな笑顔で語るのは、木のオルゴールやモバイル、素材で愛らしい絵柄のパズルやメモリーカードで知られる『キーナー』社のカトリン・キーナーさん。

湖畔で石ころや木切れを拾っては、樹の根元を小人の家と想像し、飾り立てて遊んでいたという少女は、幼稚園の先生になるための学校に進み、木工作業に魅了された。人形、人形の家、電車、ゲーム……つくっては、幼稚園の子供たちと遊んだ。

緑に囲まれ、花に囲まれ、自給自足生活のための農園が広がる施設の工房は、キーナーさんのお気に入りの場所。毎月ここに来るのが楽しみだという。

「私、木でおもちゃをつくるのがとても得意だし、大好きだということに、気づいたの」

ある時、趣味でつくったパズルとビエロのハンベルマン（紐を引っ張ると手足が動く仕掛け人形）を、チューリヒのハンデアイクラフト・マーケットに出してみたら、大好評。注文が殺到した。「とてもエキサイティングわ自分のマシオンを買って、毎日毎日木材を切っては人形やパズルをつくり続けたの」。

それが、物語の始まり。会社を立ち上げ33年。ドイツ・ニュルンベルクの国際おもちゃ見本市でも注目され、今では日本をはじめ、さまざまな国のおもちゃ屋さんにキーナー社のおもちゃが並ぶ。

「子供の頃、私がなにかをつくると、いつも母がこう言ってくれたわ。『あらカティー、なんて素敵なの！』今は、世界中のお客様さんが同じように声をかけてくれる。あの頃と同じ気分ね」

キーナー社のおもちゃがつくられる工房は、チューリヒ郊外の、広大な自然のなかにあった。見渡すかぎりの緑、鳥がさえずり、花が咲き乱れ、窓からはアルプス山脈の雪の冠が遠くに見晴らせる。ここは、心や身体に障害をもつ人たちが集団で暮らし、働きながら更正自立するための施設なのだそう。スイスでは、行政によってこのような施設が多数つくられ、そこで木材のおもちゃがつくられることも多いという。品質の良い物をつくり出す誇り。それが世界の人々の手へ渡っていく喜び。

「彼らはプロとして、とても丁寧で素敵な仕事をしてくれるわ」使う木材は、ほとんどがチューリヒ州産のカエデ。おもちゃのひとつひとつに、キーナー社のロゴとともに、「Swiss hand-made」と、誇らしげに刻印されていた。

彼女のおもちゃは彼女の人柄そのものだ、と感じさせられる。



カトリン・  
キーナー



キーナーさんが最初につくったビエロのハンベルマン（上）。すべてはここから始まった。上左はモバイルの色付け作業。ひとつひとつ丁寧に筆で塗っていく。

さまざまなモチーフのオルゴールは人気商品。紐を引っ張るとメロデューが鳴り出す（下左から2番目）。いちばん左は、ロングセラーの『キーナーメモリー』。